

## 5. 外国語学研究科

### 【到達目標】

英語英文学専攻の博士前期課程においては英米文学、英米言語のより深い研究を行い、修士論文の作成を通して高度化した言語能力を生かしてビジネス、教育界の要請にこたえる人材を育成すると同時に博士後期課程に進学するために十分な専門的知識を有する人材を育てる。

英語英文学専攻の博士後期課程においては博士論文の作成指導を行う指導教員のもとで英米文学、英米言語への造詣を深め、教育者としての高度な専門的知識を涵養した、また研究者として十分な資質を有する人材を養成する。

中国言語文化専攻の博士前期課程においては中国言語、中国歴史文化をより深く研究し、フィールドワークや修士論文の作成を通じて向上した言語能力を生かせるビジネスに人材を供給する。また博士前期課程において深めた研究をもとに博士後期課程での研究を継続する人材の育成にも尽力する。

中国言語文化専攻の博士後期課程においては本大学院博士前期課程から進学する大学院生（学位取得者過去3名）を増加させ、同時に他大学、他大学院博士前期課程から進学する大学院生（学位取得者過去5名）を継続して確保することにつとめ、ビジネス界及び大学等の高等教育機関において活躍しうる人材を育てる。

### 【現状説明】

#### （1）教育課程等

「第1章第4節」に記述した本研究科の教育研究上の理念、目的、目標に沿うべく、博士前期課程及び博士後期課程が置かれ、博士課程の標準修業年限を5年とし、これを前期2年、後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を博士前期課程と称するとともに、博士後期3年の課程を博士後期課程と称している。教育は授業科目の授業及び学位論文の作成などに対する指導（研究指導）によって行われている。

英語英文学専攻の博士前期課程においては英米言語学、英米文学の分野において高度な専門的能力を有する英語教育者を育成している。また中学校・高等学校の英語の教員のキャリアアップの場を提供し、理論に裏づけされた教授法によって、英語についての正確な知識と実践的な英語力を備え、英語教育に情熱を持つ人材を地域社会に送り出している。博士後期課程においても英米言語及び英米文化・文学の分野において自立して研究を持続することのできる研究者の養成を期している。

中国言語文化専攻の博士前期課程においては、言語、歴史、文化の各分野の専門教育を行い、学部卒業生に比して、より高度な中国語運用能力を有する有為な人材を育成すると同時に、博士後期課程に進学する研究継続意欲のある大学院生の育成にも尽力している。博士後期課程においては、それぞれの専門分野において、博士前期課程における研究をより深めると同時に、指導教員のもとで学位論文を作成し、大学等の高等教育機関において自立して研究を継続できる研究者を育てている。

各専攻それぞれの教育課程において、上述のような専攻独自の特徴を踏まえつつ、研究科としては以下のような共通の教育課程に関する対応が採られている。

社会人学生・外国人留学生等への教育上の配慮については、一定の人数を受け入れた上で、きめ細かな教育研究指導を行っている。

#### （2）教育方法等

教育効果の測定については、授業中、或いは論文執筆の過程における日常的指導の中で測定するとともに、年に数回口頭発表の機会を与え、研究状況を的確に把握している。

また成績評価の方法は、博士前期課程及び博士後期課程における講義科目・演習科目について、講義科目については年数回の研究レポートにて、また演習科目については個人研究発表時のレジュメの内容やプレゼンテーションの質に基づき、学生の研究継続意欲を刺激する立場から建設的に評価するよう心がけている。

研究指導については、指導は主として指導教授によって、講義科目、演習科目及び個別の指導によって行われている。同時に、大学院生が選択した各科目の授業を通じて、大学院生がよりの確にかつより広い視野で問題を捉えることができるよう、複数の教員によって共同して指導がなされるケースも少なくない。

2008年度から大学院学務委員会が抜本的に強化され、外国語研究科FD委員会、及び全学FD委員会との協力の下、FDを進める体制は整備されている。

### (3) 国内外における教育研究交流

学内の共同研究基金を活用して、海外研究機関との学術交流は毎年実施されている。中国言語文化専攻では、科研費の利用による学術交流も毎年行われている。さらに海外大学で客員教授としての講義、シンポジウムへの参加、海外の研究者の受け入れも行われており、大きな成果を挙げている。

### (4) 学位授与・課程修了の認定

博士前期課程については、2年以上在籍し、1年次で20単位以上、2年次で32単位以上を修得し、指導教授による講義・演習を履修して、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査及び最終口述試験に合格することを修了条件とする。修士論文は、1年次に研究テーマ・指導教授を決定した後、2年次早期に論文の題名届を提出し、修士論文中間報告会を経て、語学認定試験と修士論文に対する最終口述試験に合格したものに授与される。

博士後期課程については、3年以上在学し、20単位を修得し、指導教授の講義と演習を受講し、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査を申請する。博士の学位論文の正式な審査の過程は次のとおりである。まず学位論文の題目を提出し、外国語学研究科委員会の承認を受ける。次に語学認定試験を受験し、その試験に合格したものが論文の提出を許可される。学位論文提出後は外国語学研究科委員会において審査委員（必ず外部機関の委員1名以上を含む）を決定し、審査に当たる。審査の結果は審査委員全員による最終口述審査会に提出され、そこでの審査に合格した場合、他大学大学院等にも公開されている公聴会における研究発表を実施する。公聴会における社会的評価を受けた後、最後に外国語学研究科委員会における後期課程専門委員会において委員全体の審査を経た後、無記名投票により最終評価が決定される。

過去5年度の学位取得者は次のとおりである。

|            | 単位 人   |        |        |        |        |
|------------|--------|--------|--------|--------|--------|
|            | 2003年度 | 2004年度 | 2005年度 | 2006年度 | 2007年度 |
| 博士前期課程修了者数 | 0      | 5      | 3      | 4      | 6      |
| 博士学位取得者数   | 0      | 1      | 0      | 0      | 3      |

### 【点検・評価】

1995年の博士後期課程創設以来、英語英文学専攻においては1名、中国言語文化専攻においては8名の博士（文学）の学位を授与し、そのうち3名は中国語学科の専任教員として大学に勤務している（来年度内定1名を含む）。また博士（文学）の学位は未取得であるが、すでに中国語学科の専任教員として勤務している者が1名いる。従って、その理念と

目的の実現という面において、一定の成果を挙げており、本研究科の教育課程は評価できる。

同時に、指導教授の指導が効果的であるか否かが大学院生にとって分かりにくい、シラバスの書き方が分かりにくい、集団指導が時にうまく機能しないなど、教育方法に関するいくつかの問題点も浮かび上がっており、大学院生の現状を踏まえて早急に改善されねばならない。

本研究科、特に英語・英文学専攻において、大学院生の実員が大幅に定員を下回っているという点は極めて深刻な問題である。この点に関してはすでに述べたように、研究科委員会の諮問機関である外国語学研究科将来構想委員会において、2010年には英語英文学専攻に替わって、新たなコース制度を基礎とする国際言語文化専攻（仮称）が設けられることが決定しており、早急な改善へ向けて努力している。

### 【 改善方策 】

2010年には英語英文学専攻に替わって国際言語文化専攻（仮称）のもとに4コースを設置し、英語教育・英語学、英米文化・英米文学コースに加えて、スペイン語圏言語コース、比較言語文化コースをもうけ、社会の多様な要請にこたえて、有為な人材を生み出す制度を設置申請する手続きに入っている。この新たなコース制度と、新たなカリキュラムによって、定員の充足などの問題が大きく改善されることが期待できる。

次に、研究科委員会において引き続き審議し、2009～2010年度に実現すべき個別の改善点を挙げる。

- 1) 各専攻の教員の教育内容の充実と論文指導の徹底化をはかるとともに、教員の大学院生に対する教育研究の成果を客観的な基準によって評価するために、指導教員の指導の結果、学位を与えられた論文を保管・管理して、自由な閲覧に供するような施設を外国語学研究科に設置することを検討する。
- 2) 指導教員の果たす役割が大きいことに鑑み、指導教員の指導結果をそのシラバスにおける到達目標がどれだけ達成されているかによって評価されるべきであることから、指導教員の実施する研究指導の内容を詳細に記述したシラバスを実現することが当面の課題である。
- 3) 指導教員の負担を軽減できるよう、単位取得の制度の改革も視野に入れながら、複数導体制の制度を確立する。
- 4) 単位互換協定の実効化を図るために、当面は他の大学院に対して、まず本外国語研究科が他大学院の教育研究にどのような内容によって貢献できるか、シラバスを詳細に記して提供する。それぞれの専攻において有用であると考えられる授業科目は指導教員が担当している大学院生を指導して履修を促すことにする。